

農業土木を 支えてきた人々

喜田吉右衛門外二氏の偉業

—— 曾代用水の開削 ——

桑 原 信 男*

I. はじめに

曾代用水は、岐阜県内で歴史の古い大規模な用水であり、また喜田吉右衛門外二氏の開発による有名な用水である。それは314年前「喜田吉右衛門外二氏」が私財を費消の上、心血を注いで用水の開削を行い、水田の用水確保と大規模な新田開発を見事に完成した偉業である。

用水路はその後改良されているが、その路線は開削したものを利用しているので「喜田吉右衛門外二氏の偉業」を偲ぶことができる。この用水の開祖は、曾代用水のほとりの「井神社」に祭られ、永遠に曾代用水の守護神として受益農民からひとしく崇拜を受けている。機会をえたのでここにご紹介する。

II. 曾代用水の所在

曾代用水は、濃尾平野の北端、長良川左岸の美濃市および関市一帯の約900haを、幹・支線水路14.5kmでカンガイしている。岐阜市から国道156号線をおよそ1時間で受益地のほぼ中央の関市下有知に着くが、曾代用水土地改良区を訪ねれば、古文書等も見ることができ、また近くにある前記の「井神社」に詣でることもできる。

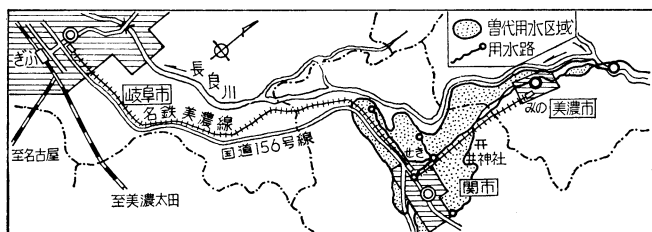


図-1 位置図

III. 用水開削と新田開発

江戸時代には産業の中で農業が重要な地位を占めていた。それは幕府および諸藩の財政収入のほとんどが、農

民の負担する貢租であり、幕府・諸藩は耕地の拡張と農業技術の振興に力を注いだ。中でも新田開発とそれに伴うカンガイ用水の開削は、最も重要な事業であった。

岐阜県的美濃・飛騨地方では、新田開発や用水開削が江戸時代を通じて盛んに行われていた。美濃の新田開発の様子は、正保～元禄期が開発の一つの頂点であった。その多くは、未開発地として大きく残されていた木曾・長良・揖斐三川合流地域一帯の三角洲と、山間僻地の山ろくの開墾地であった。近世の美濃で開削された大きな用水としては、この曾代用水と東濃の付知用水があげられる。

IV. 三氏の人柄とめぐりあい

喜田吉右衛門氏と弟林幽閑氏は尾張国に生まれ、尾州候に仕えた。晩年官を辞して浪人の身となり、寛文年間兄弟ともに関郷（関市）に来て住みつき素朴な人柄で農民と親しんだ。土地の旧家柴山伊兵衛氏は関郷新田巾に住み、気性実直で資産を保有していた。三氏は街道で出会い面識を深め、互に意気投合し腹藏なく話し合う仲となった。

ある日喜田兄弟は柴山氏に密かに話しかけた。「私共兄弟はわずかの金を蓄えている。今は浪人の身で妻子なく、また年も古い、いまさら世継をきめて譲る意志もない。しかし空しく費消する積りでもない。後世に潤う公益事業に費消し、世の人々の喜びに報いたいと思考しているが、土地柄、地理に暗く何ら手だてなくまた計画も持っていない。しかるに貴殿は、この地の旧家で地元事情に精通せられ、年令も古稀に近く抱負に富み、適当な妙案を思考できましょう。」と喜田兄弟は、私蔵の慶長金500両を差し出した。

柴山氏は思いもよらない話に驚き、また大いに喜んで言った。「このような莫大な私財の抛出を受け、使途の方策を一任されるとは男子の本懐である。私も大いに力になりましょう。私もいささか思案があるが、暫く内密

* 岐阜県岐阜土地改良事業所（くわばら のぶお）

にしておきましょう。」柴山氏数日、沈思黙考の後、喜田兄弟を訪ねて回答した。「近郷の農村カンガイ用水乏しく年々歳々干パツのため荒廃し林野になっている。もしカンガイ用水の方途を講ずれば年々の干害を免れるのみでなく、原野の開墾、畑地の転換による稲田面積の増加を計りえて、農民の利潤の増大と喜びは大きく、喜田・林氏の子孫永続の基ともなるであろう。」喜田兄弟大層喜び感激した。これこそ念願に叶う公益事業であると意を決したのである。

V. 曾代用水開削の起源

喜田・林・柴山の三氏は協議を重ね、密かに関、下有知、松森の諸村を踏査し、下有知村山王山に登り地形を眺め、上流上有知村(美濃市)を通り曾代村に至り、長良川の河中の大岩二つが流れをせき上げている姿をみて、ここを取入口の好適地を選んだ。これより水路の測量にかかったが、上有知村の川端御姫ヶ井の上に小倉山山すその岩盤露出部、さらに八幡神社の裏側の大きないわお等120間余の岩石切取の難所に遭遇して、困り果て小倉山の東の打上坂の西でトンネルの案を練ったが、工事中の土砂の崩落のみでなく岩盤掘削となればますます困難となるため、さきの120間余の岩石切取をして水路を通すことにして、松森村から下有知村、関郷、小瀬村に至る水路の測量をなし、下有知、関、小瀬、小築の諸村の荒地を巡視し、苦心さんたんの果て、ようやく曾代用水開削の計画をたてた。三氏は下有知村今宮山神光寺に詣で、ぼさつ堂前で「曾代用水開削の成否」のおみくじをひいた。「この企て当をえて風なく船出し」のお告げを受け、三氏歓喜し「この計画を実現します」と誓約した。まず取入口地先の曾代村民に諮り、引続き上有知村・松森村の村民と交渉して同意を得、さらに下有知村・関郷・小瀬村・小築村の村民に諮って同意をとりつけた。かくして喜田・柴山両氏はこの趣旨を尾張中納言役人へ伺い出た。その結果は、「有益な事業である、便宜を与え採用してよい」の内諾が下った。これこそ曾代用水開削の起源であって、時は寛文3年の暮であった。

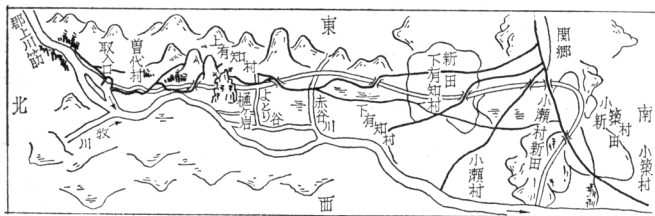


図-2 曾代用水全図(柴山家蔵)

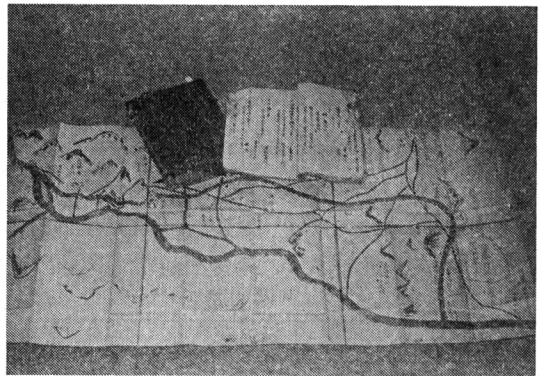


写真-1 当時の古文書と絵図



写真-2 古文書の内容(協定書)

VI. 開削事業と苦心の模様

喜田・柴山両氏は勇躍帰郷し、早速関係各村の総代・有力者をはじめ村民一般に対し正式に交渉を始めたところ、各村その領主を異にし、利害異なる事情が起り、折衝を重ねようやく10ヵ月を要して民意を糾合し、上流、下流の意向、各村の事情等をふまえて仮協定をした。かくして発起人代表柴山氏は、寛文4年10月に正式訴状を尾張藩をはじめ関係の各村領主(旗本池田氏・大島氏・館林藩・龍泰寺)に提出し、用水開削の許可を懇願した。これに対して館林藩(甲斐国甲府)は遠隔の地のことであり、他領主との政治的摩擦を考えて、用水工事の成否を不安に思い、代官が現地を視察して民意を確かめるとして許可を与えなかった。しかし尾張藩のあっ旋でようやく同6年に至って許可を与えてここに念願の工事着工の段取りができたわけである。かように各領主の許可を得るのに4年を要し、奉行所、代官所への懇請はおびただしく、往復の傍には用

水路線の確定、分水口の決定、用水路敷地の用水買収補償、用水敷地年貢米上納の方法、さらに新田の開墾、分水路等に至るまで関係者に交渉して民意の糾合に心血を注ぎ、ようやく協定の成立を得た。次いで工事実施設計にかかり取入口の施設方法、水門の構造、付帯工事の設計、人夫の員数、工事の施行方法等の仕様帳の作成等準備に多くの月日を要した。かくして寛文7年3月に起工式を行い、同年4月、上有知村地内長良川岸の通称立ヶ岩開削工事から着手し、同9年6月まで2年8ヵ月間かかり、曾代村の北端長良川の取入口から小築村字若栗の放水口まで7,142間3尺の水路およびその間に新田カンガイ支溝を6,627間3尺開削し、低地水田の悪水排水溝864間を開設した。これら総工事費は金5千兩余に上った。さらにこの外に用水路敷用地買収補償、家屋立退料等555両が投入された。

所領錯綜地域におけるカンガイ用水開削としては、全国的にも珍しい成功の事例であり、まさに大偉業として後世まで永く顕彰されるものである。

VII. 三偉人の晩年と完成への努力

三氏は多大の所持金を使い果たしたが、用水路はいまだ完成せず、再三の洪水により水路の崩壊等に多額の費用を要し、水路の維持はなほだ困難を極め、喜田氏は疲労困憊の末病に倒れ、事業の完成を見ずして寛文11年6月この世を去った。弟の林氏は私財を出し尽くし兄を失って用水への執着を失い延宝5年行方をくらました。柴山氏はさらに気鋭となり用水路の維持に努力し、寛文11年6月の水害復旧工事に当っては新田庄屋若山新助氏等の助力を得て遂行した。寛文12年には取入水門の改築が生じ領主の許可を得るため用水頭柴山氏は江戸へ、新田庄屋若山氏は名府へ数回往復し、資材の調達に奔走し、ようやく改築をなしとげた。その工費170両を要し、柴山氏の専心努力により遂に全事業の完成をみたのである。柴山氏は喜田、林氏と共同して祖先伝来の資産を費消して大成した用水路、新田だけにいかに井水組より障害されても、窮乏に落ち込んでも用水の維持経営のため

に幾十回も領主に哀訴したが達せず、延宝7年用水路敷地および新田全部を返上し、関郷字巾に小屋を建て一小農として生計を送ったという悲惨な晩年であった。

VIII. 三偉人の報恩供養

曾代用水完成により農民は干害から救われ、稲田の収穫も増大する等その恩恵に浴した。受益農民は三氏を開祖・水神様と崇め、毎年旧の6月30日(喜田氏他界の日)、ゆかりの神光寺において感謝の供養と大施餓鬼を勤めてきた。その後明治8年政府教部省より「井神社」の神社号を付与され、以来今日もなお毎年新の8月1日に受益農民(土地改良区)が多数参拝して井神社の祭を行い感謝・報恩を捧げている。大正4年、宮内省から喜田・柴山両氏に従5位を贈られている。

IX. 近代の用水改良事業

主要なものとしては、昭和9年から同12年にかけて、県営事業で取入口を上流へ650mそ上して取入水門と導水暗渠を新設し、上流部水路1,879mを舗装した。第2期工事は昭和16年から20年にかけて、下流部1,350mの舗装と分木工の改良を行った。その後未改修区間については、昭和33年から42年にかけて県営カンガイ排水事業で全面改良し、受益区域138haを新たに拡張し現在に至っている。これらの改良は三氏の偉業による水路を改良したものである。曾代用水区域は着々とホ場整備が進み、今や中濃地域の穀倉地帯となり、秋には黄金の穂波が美しく、また近代農業の芽生えともいう園芸団地群が白く光を放つ等魅力ある農村に蘇えりつつある。

筆者は、昭和34年から同39年まで県営曾代用水改良事業所に勤めて三偉人の開削した幹線用水路の改良に従事して、往時の難工事個所の工事を行い昔を偲んだ一人である。三氏こそ岐阜県における農業土木の偉大な先覚者として深く崇拝し、末長く曾代用水の維持継承を念願するものである。

資料文献

- 1) 岐阜県史、岐阜県の歴史、曾代用水の沿革史

[1979. 9. 21. 受稿]

